学園長だより

第7回

美しき別れ

愛知淑徳学園理事長・学園長　小林素文

大学の卒業式の数日前、一通の手紙が届きました。『学園長便り　第二回（一人の学生とのお別れ）』で紹介した、理不尽な事件に巻き込まれ非業の死をとげた「一人の学生」の御両親とお姉様からでした。卒業生宛てでしたので、卒業式の当日、私の祝辞の最後に披露させていただきました。

「愛知淑徳大学卒業生の皆さまへ

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。ご父兄の皆さまにも、心よりお祝い申し上げます。

今日この場のどこかに、娘も卒業生の皆さんと一緒に笑顔でいることと思います。……

娘の学友の方々……私たち家族を励ましていただき本当にありがとうございました。

明日が来ること、「また明日ね」と言って続く毎日、楽しい、悲しい、スキ、キライこんな感情を感じられる事に感謝しています。毎日をもっと濃く生きようと思っています。

これは娘のお友達が送ってくれた言葉です。

皆さんがこう感じて人生を送ってくれることを願います。

本日は本当におめでとうございます」

大切な人を突然に亡くされた人々の悲しみに心が痛むのは、二年前の3・11の大津波で、家や車や町、そして人々が流されていく光景を目の当たりにして、日本中、世界中の人が感じたことです。そして、当たり前のように続く普通の日常が送れることに感謝をしました。

ご家族からのお手紙は、「また明日ね」と言って続く日常の大切さを、卒業生だけでなく、ご父兄、教職員、会場にいた全ての人に、改めて感じさせてくれ、切なくも凛とした卒業式となりました。

永遠（とわ）に消えることがない、深い悲しみと無念の思いを抱いておられながらも、本学の卒業生に祝福のエールをお送りくださったご家族の皆様に心よりの感謝をし、鎮魂の祈りを捧げます。　合掌

＊

高等学校の卒業式は、本校が中高一貫校であるだけに、六年間の思いが詰まった厳粛な式でした。

児童から大人の入口まで、多感な時代を六年間、彼女たちの人生の三分の一を、同じ制服を着て、「淑徳魂」「淑徳晴れ」を何度となく聞き、共に学び、共に泣き、共に笑った日々からの旅立ちです。

式の最初に歌われた校歌は、最後の全員での斉唱となるからでしょう、大きく口を開き、大きな声で、たとえ涙ぐんでいても真っ直ぐに校旗を見上げ歌っていました。その姿はとても美しく、中高一貫となり、一段と上達をしたオーケストラ部が奏でた曲のタイトルのごとく「威風堂々」としていました。

こうした高校の卒業式は、毎年繰り返されるお馴染の風景ですが、年どしに心に響くのは、毎年咲く桜に心打たれるのと同じなのでしょう。

＊

卒業生をお送りすると間もなく新入生を迎えます。「日に新た、日々に新たなり」です。

「卒業という美しき別れかな」（清崎敏郎作）

愛知淑徳学園は今年百九年目となります。百年以上続いてきたそれぞれの「美しき別れ」に思いを馳せ、また新たな歴史を重ねてまいります。

本年度も宜しくお願い申し上げます。